

開催日：平成28年11月29日（火）
開催場所：釧路地方合同庁舎5階 第1会議室

釧路湿原自然再生協議会 第17回湿原再生小委員会 議事要旨

会議の冒頭、事務局から第16回湿原再生小委員会の発言概要と今後の検討方針（案）について説明を行った。

■議事1：幌呂地区湿原再生事業

事務局から説明を行い、内容について協議が行われた。

○平成28年8月の出水報告 釧路川流域の状況報告について

（委員）

下久著呂の水位グラフの線が途切れている。水が増えて木の枝などが流れてきたからなのか、観測が途切れた理由を教えて欲しい。

（事務局）

下久著呂観測所（光橋）は、8月21日14時で観測が出来なくなった。橋桁まで水位が上昇して、おそらく流木か何かかぶつかりケーブルが切断され観測ができなくなった。

（委員）

久著呂川はあの橋を水が超えていったのか。

（事務局）

現地を見る限り橋の上を超えて流れたような形跡はなかった。橋桁の下すれすれで流れ、その脇を、橋の左右を通る形で水が流れていったのだと思う。

（委員）

このような出水がまた起こるかもしれない。今後どの様に観測するのか伺いたい。

（事務局）

今後の出水に向けての対策は、まだ検討中の段階である。現在は仮の観測機器を設置して観測している。

（委員）

今後こういう事があるというのを想定して対応を考えてもらいたい。

○幌呂地区湿原再生について説明

(委員長代理)

7月と9月に調査をおこない、9月調査では大規模な出水により排水路の水が逆流して再生現場に流れ込み、かなり植物にダメージがあった。こういうことが何年かに一度起きることで、外来種等が一度リセットされるため、むしろ湿原の再生にとっては出水が起こった方がよい。ずっと乾いたままだと、結局外来種等が入ってきてどんどん湿地が変わってしまう。アメリカオニアザミを去年確認して困っていたが、今年はこの出水により絶滅した。その他は例年の結果とあまり変わらない。

切り下げ深さは40cmくらいが大体良いところで、40cmを基本として場所によって適宜切り下げ深さを変えた方がよいと考えている。ただ今年のような大出水が度々あれば、それほど切り下げなくても良いかも知れないため、モニタリングしながら確認していく。

(委員)

排水路埋め戻し高さは、切り下げの地盤の高さと同じなのか、それとも区画ごとに水が横に流れていかないように少し高くなっているのか。

また、埋め戻しする土を少し締め固めるなどの配慮をしているのか。

(事務局)

排水路の埋め戻し高さは、切り下げ箇所の地盤と頭をそろえてフラットにする計画である。排水路として利用されていたところなので、実際には土砂を入れた場合にどうしても沈下してしまうため施工するときは少し高く埋め戻し、時間が経てば結果的にフラットになるように施工している。

水が集まり転圧が出来ないため、基本的には土砂を投入するだけで、締め固めは行っていない。

(委員)

切り下げ深さ40cmといっても地盤高は下流に向かって低くなっているため、埋め戻しの高さが地盤高と同じであれば地表面がつながり、勾配によって水が下の方に溜まっていく。上流から施工を進めていくと順次地盤高は下がっていくため、埋め戻しの際に仕切りながら少しずつ高く施工していかないと上流は乾燥する。埋め戻し高さを少し高くして仕切れば、区画ごとに水が溜まりその効果が期待できる。

(委員)

今年の秋に、幌呂地区湿原再生地で「ツルシギ」や「ダイゼン」といったシギの仲間が多く確認された。おそらく餌となる生物がいたのではないかと考えられる。これまでに、この場所で水生生物の調査をしているのか。また、今後水生生物の調査をする予定はあるか。

(事務局)

今の時点では調査をする予定はない。今後もシギの仲間の確認が続き、委員会で調査が必要だと提案があれば、委員会で調査を行うか改めて検討していく。

(委員)

冠水状態が続くようなら、今後生物が定着する可能性があり、環境の変化が見られるのではないかと思う。可能なら検討して頂きたい。

(委員長)

シギの仲間の餌となる生き物の調査も是非の方が良いとの事だったが、事務局としてはこの委員会で必要だと皆さんから提案されれば、それについて改めて検討していくということである。

(委員長代理)

シギなどは小魚を食べているのか。

(委員)

昆虫や動物性の生物を食べている。干潟などではゴカイや貝類などを食べる。

(委員長代理)

今回の出水では排水路が逆流し、排水路から湿原再生地へ水が流入した。排水路にいるような小魚が湿原の中に入ってくる可能性は十分ある。もし小魚を食べているのであれば、魚類などの水生生物調査が必要だと思う。

(委員長)

新たに水生生物を調査項目に加えるかは、今後の委員会の中で皆様のご意見を伺いながら検討することになる。幸い、この小委員会の委員に魚の専門家や底生動物の専門家もいる。

(委員)

暗渠管撤去の説明図では暗渠管から水が出ているが、暗渠管は機能していたのか。

(事務局)

暗渠管撤去時には水が流れていた。暗渠管として機能している状態だった。

(委員)

私たちが湿原の中で暗渠管などを使って畑を乾かすのに苦労している。こういう管が機能していたということは、湿原に戻すにはマイナスだが、我々酪農をやっている人間にと

っては非常にプラスになる参考資料である。

施工前のグラウンドレベルからマイナス 90cm～1m の間に暗渠管が埋設されているのか。

(事務局)

ここは平均 50cm 位の掘削深だが、大体 40～50cm くらいの位置に入っていた。施工時に、一度深めに掘り、どの位置に入っているのか確認しながら掘っていくようにしている。

(委員)

暗渠管がほとんど機能していたということが分かり、土地改良のために大変参考になった。

■議事 2：達古武湖自然再生事業について

事務局から説明を行い、内容について協議が行われた。

(委員)

達古武川の源流はどこなのか。

(事務局)

ちょうど標茶町との境界で、こちらの方に農家さんがいるが、この部分が最細部の源流である。ここで平成 26 年に環境省で調査を進めていく。

(委員長)

資料 4 の 2 ページの右側の空中写真で白い線で囲んでいるところが、達古武湖の集水域である。これを見ると一番左下の丘陵地の奥で、一本だけではなく何本もの水源がある。

(委員長)

達古武モニタリング調査結果について、ヒシがすくなくなるとネムロコウホネやヒツジグサ等が少しずつ増えてくることが分かった。次年度も引継ぎモニタリング項目の調査を続けることで了解した。

■議事3：その他

○広里地区湿原再生事業について

(委員)

遮水壁を設けるにあたり不透水層がまだどこにあるのか分からないために、調査を実施するとのことだがこの調査経費はどのくらいかかるのか。

(事務局)

調査の方法やボーリングを何本掘るかにもよる。1本当たりだと、深さにもよるが、数十万円程度になると思う。電気探査であれば電極を何本打ち込むかによって変わる。

○その他

全体を通しての質問、意見等はなかった。

以 上